

【子ども・若者】

- アジア競技大会に向けてスポーツへの関心が高まっていくと考えるが、幼いうちから競技性の高いスポーツをやるとスポーツ障害が懸念されるとも言われている。まずは体を使う遊びを十分に楽しんだ上で、自分の関心のあるスポーツに向かうという順序を踏むことが大切である。
- 今の子どもたちは、友達とまちを歩いてまわるなどして、まちの魅力を見つけるチャンスが全くない。また、地域の異年齢の方々との触れ合いをつくりづらくもなっている。大都市ではなかなか難しいと感じるが、子どもたちが自由に遊ぶことができるまちになれるとよいと考える。
- 小・中・高・大学のそれぞれで地域課題について実際に地域に出て勉強しているが、就職すると途切れてしまう。働きだした若者にとって、地域に参加することが魅力に感じるような都市づくりが必要である。
- アジア競技大会に向けてスポーツが盛んになっていくのはいいことだが、学校体育や部活動の強制や過熱化、体罰などの問題にどのように切り込んでいくかが課題である。
- 外国人市民の課題が増えていると言われているが、日本と外国の架け橋になり得るグローバル人材と捉えることもでき、外国にルーツを持つ子どもや若者をどのように育てていくかという視点と合わせて考えていくこともできるのではないかな。
- 日本語指導が必要な子どもたちへの教育には、ICT技術を活用していくことを考えていく必要があるのではないかな。
- 社会の中で子どもを育てていくという視点からいうと、お年寄りだけではなくて、商店街や地域の方が学校に入って、「こんなことがあったら地域の力が使えますよ」などの学校を応援する仕組みがあるとよい。子どもが地域に対して郷土愛を持つ芽生えになるとともに、元気なシニア世代の力を活用することにもつながり、結果として地域の活性化にもつながるのではないかな。
- 名古屋市では女性の20歳から24歳が関東へ転出超過となっており、また、学生は関東、関西に流出している傾向にあるようだが、名古屋圏はものづくり企業が多いこともあり、理系分野では関東の大学に行っている女子学生がUターン就職で戻ってくることも多い。そのため、ものづくりの地である名古屋圏としては、特に理系の人材を育てていくことが圏外への人材の流出を防ぐ方策にもなると考える。
- 理数系の人材を育成していくためには、男子は理系、女子は文系というアンコンシャスバイアス（無意識の偏見）をなくすることが一番である。中学校や高校の先生方に、女子の将来の選択肢として、理系や工学があまり認知されていないと考えられるので、そういったことも啓発の一つの方法ではないかな。
- 工学部の女性は地元で就職する割合が高いという現状があり、女性を中心とした理系人材を増やし、ものづくりの地である名古屋の強みを生かして名古屋市で就職し、さらに子どもを産み育てるという環境を根づかせていくことが少子化や人口減少にもつながる戦略ではないかと考える。
- 初等教育の段階から性別による偏見をなくして、性別に関係なく、みんながワーク・

ライフ・バランスを保ち、多様な働き方を許容する企業や組織を増やしていくことが必要である。

- 子どもたちが活躍できる、子ども主体の地域づくりの視点が抜けている。2030年までに地域で子どもを育て、子どもと大人のパートナーシップをどのように築いていくのかという視点が大切である。
- 我が国は子どもの権利条約を1994年に批准しているが、これの徹底が国レベルで非常に弱い。ぜひ名古屋市でパンフレットの作成や、子どもたちとのディスカッションに取り組んでもらいたい。いじめは犯罪でもあるが、人権問題として捉えることは、いじめの根本解決につながり、ものすごく重要である。
- 子育てと教育の最大のテーマは自立である。その点でアジア競技大会はよい転機になるが、オリンピック選手育成のための勝利至上主義・成果主義に陥らないように気をつけなければならない。自ら計画を立てて、自分との闘いに挑んでいけるような子どもを育てていくという教育のビジョンを持つ必要がある。
- 子どもたちのシビックプライドを育成していく必要がある。例えば、東日本大震災の被害を受けた福島の高校の学生たちは、復興に向けた活動を子ども主体で構想している。東京の進学校でも、いわゆる名門高校に入ったはいいが、目標がなくなり、バーンアウトしてしまっているのを回復させて、もっと大きなスケールのための学びに転換させる取り組みが広がっている。名古屋の高校生も、もっと飛躍したことができるのではないかと考えている。
- 名古屋にはユースセンターが1つしかないが、政令市で1つしかないのは名古屋ぐらいである。複数あれば、それぞれの若者同士で交流し合い、切磋琢磨できる。職業や学校が違う若者がわいわいと話し合える場が名古屋のあちこちにできるとまちが活気づくのではないか。
- 名古屋には「子ども条例」があるが、条例があることを知らない子どもや親が多い。条例の存在を広げる取り組みや、虐待や貧困などの厳しい状況に置かれた子どもたちの権利を擁護する取り組みをしっかりと進めてほしい。
- 日本語指導が必要な子どもへの日本語教育をどう充実していくか。移民を積極的に受け入れてきた多くの国では、その国の言語を学ぶ公的な機会が保障されている。そういう体制を整えようと思ったらなかなか大変だが、そこでパワーを出すことができればすごくいい地域ができてくるのではないか。
- OECDが2015年にEducation2030という教育プロジェクトを立ち上げた。2030年になっているいろんな仕事もさま変わりしてくる中で、経済効果だけではなくて、どういう人材が必要なのかということが集中議論されて、「生き延びる力」の育成が必要であると、学力観がすっかり変わった。これは①新しい価値の創造力、②緊張とジレンマの調整力、③責任をとる能力の3つの柱で構成されている。
- グローバル化した都市の強みにどう生かしていくのかという視点から、子どもたちにとってすごくいい学びのチャンスになってくるとも考えている。外国から来ている友達がクラスにいることをどう活かしていくのが課題である。
- 災害や事件、事故もそうだが、地球規模でいろんなことが起きていく中で、自分がきちんと考えて生き延びるために心をどう育てていくことが重要である。

- 今の子どもたちを見ていると、自分の気持ちを表現して相手に伝える力が弱くなっていると感じる。自分の意見を述べ、時に自分は困っていますと他者に伝えることは非常に大事なことである。
- いま学校の先生の長時間労働の問題もあり、時間になると教室に鍵をしめてしまうので、子どもたちが学校の中にとどまれないという話を聞いた。一部の教室を先生から地域の方にバトンタッチして地域の人間に任せるなど、何かの事情で家に帰りたくない子どもたちの居場所にしていくことができると地域とのつながりにできるのではないかな。
- 東日本大震災で有名な「釜石の奇跡」は、生徒たちの自己肯定感が起こした奇跡であった。自己肯定感を持つことで、自分や家族、近所の方をしっかりと大事にでき、自分に誇りが持てる。自分を愛せる、自分に自信が持てる教育が、一人の死者も出さなかったことにつながった。
- いじめは自己肯定感を抹殺する行為であり、その防止は非常に重要である。名古屋で取り組んでいる子ども応援委員会は、これからのあるべき学校の姿である。

【子育て】

- 都市魅力度調査ではワーストワンだったが、テレビの市民へのインタビューを見ていると多くの人が「住みやすい」と言っていた。この「住みやすさ」と「子どもの育てやすさ」の関連を深めていく必要があると考えている。
- 子育ての課題は、親御さんや学校の先生たちだけでは背負いきれないものもあり、どのように都市型のコミュニティをつくっていくかが重要である。勤労世代のコミュニティマインドをつくり上げ、地域での子育て環境をつくっていく必要があるのではないかな。
- 切れ目のない子育ては、行政の所管が分断されている中でどのようにリレーしていくのかを具体的にしていくことが重要である。ちょっとしたことを気軽に相談できる場所が地域に幾つかあり、それぞれが連携できているような形をつくっていければ、子育てを応援していく姿勢が見えやすくなるのではないかな。
- 男性も女性も家事能力が非常に重要であり、お父さんがしっかりと家事を担える家庭は、家庭内のバランスがとれており、家事も仕事も子育てもひとりでやらなくてはならないお母さんたちは、どうしてもぎすぎすしてしまう傾向にある。
- 子育てや教育を計画の中で柱としていくことに加えて、それを可視化していくことも極めて重要である。岐阜県のある市では、駅の目の前の一等地に子育て健康プラザがある。これは市長の英断でつくったもので、「次世代をしっかりと育て、住み続けたいと思う故郷としてあり続けることが行政の大きな責務だ」とおっしゃっており、子育て支援・健康づくり・交流・市民参画の拠点となっている。
- 社会で子どもを育てる視点を打ち出していったらどうか。そのためには、父親の育児参加というのも重要だが、お父さんお母さん関係なく、地域みんなの社会支援で子どもを育てていくといった社会全体の意識改革が必要である。
- 家庭で育てられないお子さんを施設だけではなくて、社会や地域で育てるという意識が大切である。国が新しい社会的養育ビジョンのもとで里親委託を推進していること

から、里親の育成を子育て支援の中で打ち出していくべきではないか。

- 外国人市民は、言語や文化の壁により子育て支援などのシステムを活用できない方が多いことが想定されるため、アウトリーチが重要である。
- 都市像2の「安心して子どもを生み育てることができるまち」の中に、「地域や企業など社会全体で子育て家庭を支援しているとともに、」とあるが、企業の役割は、利益を上げ、それを株主と税金として国に還元することと、可能な限り良質な雇用を創出・維持することであるため、企業が子育て家庭を支援するとの記載は言い過ぎではないか。
- 戦略2の（2）安心して子育てできる！「子育て応援戦略」の中に、「妊娠から子育てにわたる…」とあるが、妊娠・出産に関わる情報提供や相談、不妊治療への支援など妊娠前からの支援が必要であるため、「妊娠『前』から子育てにわたる切れ目のない支援」が望ましいあり方ではないか。

【計画期間について】

- AIなどの技術が進展し、住み方や働き方が変わっていくことが想定される中、教育も変わる必要があると感じている。計画期間の目標が2030年だが、国際社会も2030年を1つの区切りとしている。その大きな展望で見たときに名古屋の場合は、アジア競技大会が2026年、リニアの完成が2027年と竹の節を刻むように目標を持って動きやすい。

【地域の活性化】

- 地域コミュニティの活性化においては、どのようにコミュニティを支える人材を育成していくかが課題であり、町内会などのコミュニティをうまくドライブできる人材を教育していくことは、生涯学習の面からも重要な課題である。
- 地域コミュニティの問題は非常にややこしい面もあり、チャレンジするのは難しいと思うが、これをやらないと防災の問題もほかの問題もクリアできないので、ぜひチャレンジしていただきたい。
- 外国人市民が、生涯学習センターなどで日本の文化を学ぶことや、コミュニティの中で母国の文化を地域に発信できる機会をつくるなどができること、問題ではなく、地域の力や強みに変えていくことができるのではないか。

【男女平等】

- こちらの地方で見られる、例えば、男性にお酒をつぐ女性が多いなどの様子から、おそらくこの地域の女性は、関東に行くとやりやすい、差別がないところがあって戻ってこなくなるのではないかと感じている。

【都市魅力】

- 都市の魅力は「行ってみたいまちナンバーワン」よりも「住んでみたいまちナンバーワン」のほうが大切だと考えており、住みやすさの重要な要素として「子育て環境」がある。
- 若い世代が親元を離れ、外を見に行って、名古屋の魅力に気づいて戻ってくる。よそ

の土地の若者が、名古屋に来て名古屋で学んで、名古屋っておもしろいと言って残ってくれる。そういう交流ができるといいのではないか。

【アジア競技大会】

○2026年のアジア競技大会に向けて、いまのうちから子どもたちに対してアジアの国々や文化についての教育を行っていくことで、2026年の大会時にボランティアに参加するなどしてもらえるのではないか。

【産業】

○都市像5の「地域の産業が活性化し、高い産業競争力を有するまち」とあるが、名古屋市の充実した都市整備・暮らしやすさ・災害対策・子育て支援等は、地域の産業の高い競争力の上に成り立っており、地域の産業競争力に関する文章は、都市像のもっと上位に置かれるべきものではないか。また、そのことを忘れてはいけない。

【持続可能な開発目標（SDGs）】

○SDGs全体としての哲学は、誰も置き去りにしない社会をつくろうという非常に壮大なことで、教育で重要なことは、誰も置き去りにしないという価値をどうつくっていくのか、そのための学校をどのようにつくっていくのかである。親の年収による進学率に格差が生じているという経済的格差の問題と教育格差というところが、古典的なテーマではあるが、どの子どもも置き去りにしないまちをつくっていく教育理念を正面に据えて打ち出していくべきである。